聖地巡礼ファイル #252

古都に隠された十字架（後編）

古都に隠された十字架（後編）

京都･太秦

百瀬直也

- インターネットでこのページを検索した方々へ

この作品は『聖地巡礼ファイル』の『#250 古都に隠された十字架（前編）』の続きです。下記ページがトップページとなっています．なるべくならば、まず前編から読むようにしてください。 http://www.ne.jp/asahi/pasar/tokek/SJF/index.html

2002 年 5 月 4 日、土曜日

二泊三日の京都･天橋立旅行の３日目の最終日は、京都の秦氏にまつわる神社仏閣巡りだ。

２日目の天橋立の旅については、別の作品である天橋立編で書くことにする。

ホテルをチェックアウトして、京都駅に荷物をあずけて、出発。

今日の最初の目的地は、東寺だ。

ここは何度も訪れているが、真由美の家が真言宗なので、参拝することにした。

詳しくは書けないが、弘法大師空海には、二人とも、ただならぬ縁がある。

一説によると、空海も景教の影響を強く受けているといわれる。

空海は 9 世紀に遣唐使として唐に渡り、仏教を学んだ。

その頃の唐の首都長安には、仏教、道教、ゾロアスター教の寺院の他に、景教の寺院があった。

空海はインド人の僧である般若三蔵に師事し、サンスクリット語などを学んだ。

じつはこの般若三蔵は混合宗教的信仰の持ち主で、景教の信奉者でもあったともいわれて

いる。
それによると、空海はイエスの教えに強く影響され、新約聖書を日本に持ち帰ったという。
その説を裏付けるかのように、高野山では、勤行のはじめに十字を切る習わしがあるという。

また、真言密教の灌頂の儀式は、じつはキリスト教（景教）の洗礼式を取り入れたものであるらしい。
そのことは、高野山の僧侶も暗に認めているという。
その灌頂に使う祭壇の装身具には、模様に十字架が含まれている。
だが、景教とのかかわりは高野山で秘密にされているようで、なかなか一般人の耳には届かない。
ケン・ジョセフ・シニア＆ジュニア著の『[隠された］十字架の国・日本』によると、景教研究家のエリザベス・Ａ・ゴードン女史がかつて高野山を訪れて、僧侶を捕まえて景教のことを聞いてみた。
その時、真言宗のお坊さんは「ええ、うち（真言宗）は景教から来ていますから」と、いとも簡単に答えたという。
そして「うちは単なるグレた景教にすぎないんです」とも。
外国人だから気軽に口にしてしまったのだろうが、日本の歴史を大きく変える大事だから、本来は真言宗内部の極秘事項なのだろう。

弘法大師空海の景教との関係は、唐へ渡る以前からあったのかもしれない。
空海が秦氏と深い関係があることは、すでに前編で書いたとおりだ。
もし秦氏たちが景教徒だったとしたら、空海の宗教思想に大きな影響を与えたかもしれない。

大日如来の前で手を合わせる。
空海にとってみれば、この仏様もイスラエルの民にとっての創造主であるヤーウェと同一

視する存在だったのだろうか。
二人で、おみくじを引く。
出たのは、23 番の「吉」だ。
真由美は 25 番の「吉」
こんどは番号こそ違うが、やっぱり二人とも同じ「吉」が出た。
この 3 日間で、これで 4 回目の『シンクロニシティー』だ。
いったいどういうことなんだろう。

次の目的地は、太秦（うずまさ）だ。
嵯峨野や太秦は、秦氏の本拠地ともいえるところだった。
市営地下鉄と近鉄と京福電車を乗り継ぎ、蚕の社前駅で降りる。
歩いて 5 分ほどで、蚕の社を発見。
正式名を木嶋坐天照御魂神社（このしまにますあまてらすみたまじんじゃ）という。
ここには蚕養（こかい）神社、別名カイコノヤシロという境内社がある。
この「蚕の社」が神社全体の通称になったのだろう。
蚕の社は、かつて秦氏が養蚕と織物の神を祀ったのが始まりといわれている。
古文献によると、朝鮮から渡ってきた秦氏らは金・銀・珠・絹などを朝廷に献じたのみでなく、養蚕を行って絹を織り、献じたという。
絹はユダヤ人商人にとっても重要な交易品であり、シルクロードにおいても、絹の交易をユダヤ人たちが独占していたという。

木嶋坐天照御魂神社の方は、宇宙創造神である天御中主命（あめのみなかぬしのみこと）を祀っている。
秦氏一族にとっては「ヤーウェの神」だったのか。

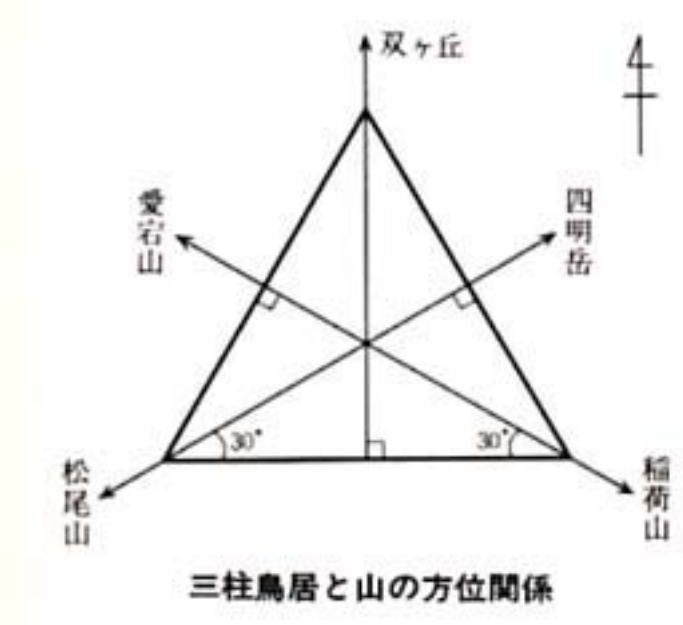
木嶋坐天照御魂神社本殿

この神社は、三本の柱を使っためずらしい三つ鳥居（三柱鳥居）があることで知られている。
三柱鳥居は塀で囲まれた敷地の内にあり、神社の人たちが掃除をしていて、近くから見ることが出来なかった。
だが、三つの柱の鳥居は神秘的なたたずまいを見せていた。
本来は鳥居が池の中に立っているらしいが、掃除のためか、水が抜かれているようだ。
この池は、手前の塀の外にある別の池とつながっている。
こちらも水が入っていなく、あんまり池だという形をしていないので、言われなければわからないだろう。
実はこの池が重要な意味をもっていたということは、その時はまったく気づかずに、写真を撮っていた。

この三柱鳥居は、上から眺めると正三角形になる。
これはダビデの星を表したものだと説く者がいるが、こじつけだろう。
景教の三位一体を表したものだという説もあるが、そうなのかもしれないが、これも説得力に欠ける。

それよりも、もっと注目すべきことがある。
大和岩雄の『秦氏の研究』によると、この三柱鳥居は、冬至と夏至の朝日・夕日を遥拝するための方位を示す役割をもっているというのだ。
左の図を見ていただきたい。

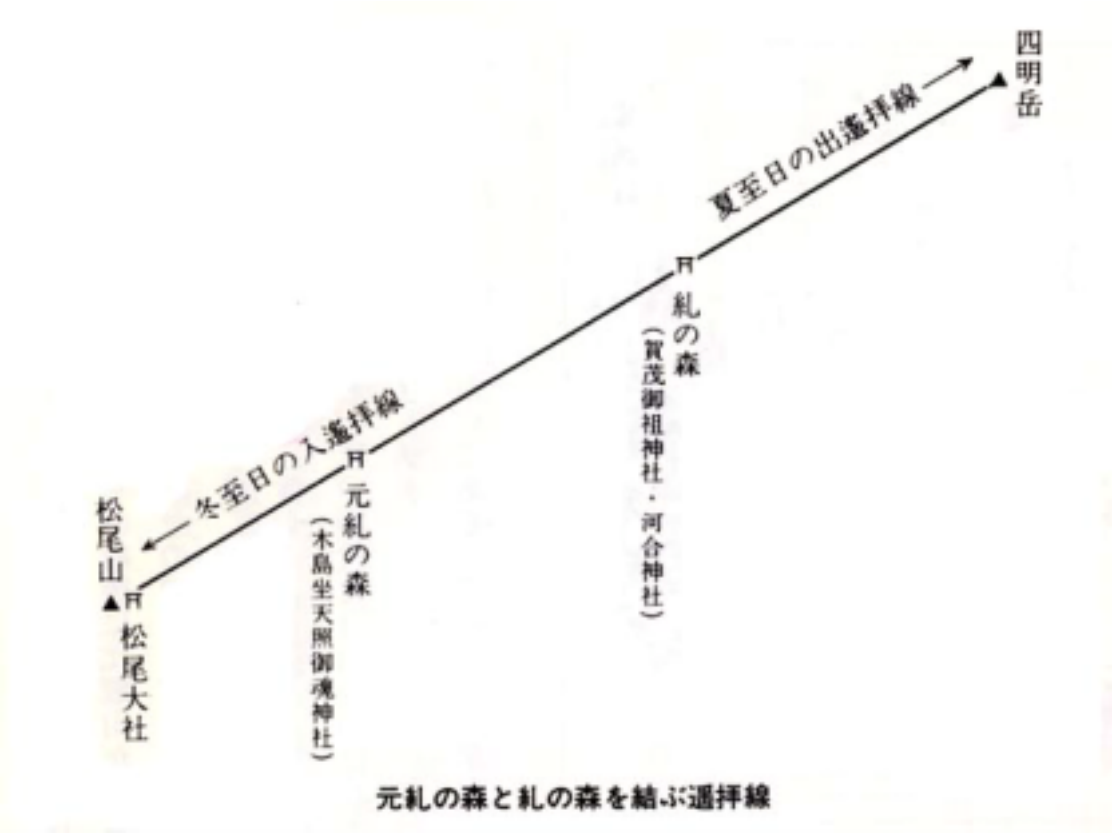
正三角形の各頂点の延長線上に、双ヶ丘（ならびがおか）、松尾山、稲荷山がある。
また、南方向を除く二辺の中心から



図は『秦氏の研究－日本の文化と信仰に深く関与した渡来集団の研究』（大和岩雄、大和書房）より引用

直角に線を引くと、その延長線上に愛宕山と四明岳がある。
冬至の朝に三柱鳥居に立つと、稲荷山の山頂から朝日が昇るのが見える。
この山は秦氏にとっての聖地である。
そして夏至の朝日は比叡山系の主峯・四明岳から昇る。
比叡山の神も秦氏と深くかかわっている。
冬至の夕日は愛宕山に落ち、夏至の夕日は松尾山の日埼峯に落ちる。
愛宕山は、秦氏である秦澄が開山した山岳信仰の山であり、日埼峯は秦氏が祀る松尾大社の聖地だ。

このように、三柱鳥居の正三角形は、秦氏の聖地を指し示すという隠された目的があったのだ。
双ヶ丘には大規模な石室をもつ古墳があるが、これも秦氏との関連が考えられるものだという。
前述の大和岩雄によると、この神社は死と再生の祈りの地であり、再生祈願の神が天照御魂神なのだという。
不思議なことは、これだけではない。
下の図を見ていただきたい。



図は『秦氏の研究－日本の文化と信仰に深く関与した渡来集団の研究』
（大和岩雄、大和書房）より引用

前述のように、三柱の鳥居は、秦氏にとっての聖地である松尾山と四明岳を結ぶ直線上に建っている。

そして、その同一線上に、「糺（ただす）の森」というのがある。

これは賀茂御祖神社・河合神社の森の呼称である。

また、三柱鳥居は池の中に立っているが、この池は「元糺（もとただす）の池」と呼ばれる。

なぜ「糺」の字がついた森にある神社が、同一線上にあるのだろうか。

西郷信綱によると、ヒエ山（比叡山）とは朝日ささす山の意味だという。

大和岩雄の説では、糺の森と元糺の池は、ヒエ山から昇る朝日が「タダサス（一直線にさす）」地であり、この「タダサス」が「タダス」に転じたのではないかという。

だが、違った見方もある。
明治時代に「秦氏はキリスト教徒だった」という先見的な説を出した、東京文理科大学の佐伯好郎博士が唱えたものだ。
佐伯は自らクリスチャンであったが、景教研究の世界的権威としても知られていた。
元糺の森の「糺す」は「穢れを糺す」という意味がある。
そして、糺というのは禊ぎを行うことだと佐伯は考えた。
秦氏が居住していた地域は「山背（やましろ）」と呼ばれたが、秦氏と山背に住む人々は、年に一度、木島神社の元糺の池に体を浸し、禊ぎを行ったという。
そして、驚くべきことには、この元糺の池の造りは、現在もエルサレムに存在するバプテスマ（洗礼）を行うための池とそっくりだというのだ。
その池の写真が『失われた原始キリスト教徒「秦氏」の謎』（飛鳥昭雄・三神たける）に載っているが、たしかによく似ている。
ちなみにこの本はよく調べられていて、秦氏研究の入門書として読むのに最適だろう。
本稿の執筆にあたっても、大いに参考にさせてもらった。

バプテスマというと、キリスト教の入信儀式として、手で頭に水をかけることと思われがちだ。
だが、その他に「浸礼」といって、川や教会堂内に設けられた水槽に全身を浸す方法もある。
そして、こちらの方が本来のバプテスマの方法だったようなのだ。
昔は、川や池に入って全身を浸して身を清めたのだろう。

元糺の池に似ていると言われる池に、新約聖書に登場するエルサレムの『シロアムの池』がある。
ここでも、体を水に浸して身を清めるという儀式が、イスラエルの宗教と日本の神道で共通している点のひとつとしてあったのだ。
バプテスマはユダヤ教にはない習慣だろうから、ここではキリスト教か景教ということに

なるが。
やはり、元糺の池はバプテスマを行うための池なのだろうか。
池の端に段差があるのも、人間が中に下りて入りやすくするためだろう。
「タダサス」が「タダス」に転じたとするよりも、やはり「元を糺す」は禊ぎをすることと解釈した方が妥当なのではないか。
ちなみに、「糺の池」と呼ばれる池は下加茂神社にもあり、毎年ここで手足を洗う祭が行われるという。
かつての天皇も、ここで禊ぎを行ったといわれている。

ところで、いくつかの神社仏閣や山の頂が直線上に配置されていたり、三角形など特定の形を作るという例は、日本全国に広く見られる。
いわゆるレイラインと呼ばれるものだ。
そして、夏至や冬至や春分・秋分の特別な日に、ある地点から別の地点を眺めると、そこに朝日が昇ったり夕日が沈んだりするということも、日本だけでなく世界各地の古代遺跡で共通して見られるものだ。
これらの意味するところは明確になってはいないが、太陽信仰に基づくものであるらしい。
そして、秦氏は太陽信仰やレイラインの要素ももちあわせた一族だったようだ。

太陽信仰といえば、奈良に「太陽の道」と呼ばれるラインがある。
ラインといっても目に見えるわけではなく、北緯 34 度 32 分の東西の直線上に、春日神社、多神社、白山神社、三輪山、長谷寺などの神社仏閣や山があるという不思議なところだ。
これらの神社仏閣のいくつかにも、秦氏の影が見え隠れしているのだが、これはまた別の機会に書いてみたい。

蚕の社に話を戻すと、蚕はオシラ神の信仰と結びついているという。
オシラ信仰は、東北地方などに分布する家の神の信仰だ。
桑の木などの先に男女 2 体の顔や馬などの顔を描いたものに、オセンダクと称する衣装を

包頭形や貫頭形に着せて、家の神棚の祠に納めまつったものを「オシラ様」とか「オシラボトケ」と呼ぶ。
オシラ様は、イタコなどの民間宗教家が所有していることもある。
大和岩雄の『秦氏の研究』によると、オシラ信仰は蚕に関係しているらしい。
大和は秦氏を朝鮮半島（新羅）からの渡来民だという説をとっていて、オシラ信仰も秦氏が朝鮮半島からもたらしたと主張している。
中国では、太陽は東海の島にある神木の桑から天に昇るとされ、日の出の地を「扶桑（ふそう）」と称したという。
桑や絹が太陽信仰とかかわっていることが、木嶋坐天照御魂神社の境内社として蚕の社がある理由だと、大和は書いている。

Ikko Kurosawa の Web 論文『摩多羅神はどこから来たのか？～ダビデの子孫～』によると、おしら神はカナンの地で信仰されたバアル神の一柱であるオシラー女神ではないかという。
このオシラーはセム族ではアシュラーと呼ばれ、天界の雌牛だった。
つまり、カナンの神名オシラーが日本の秦一族の主要な養蚕発展地で「おしら様」として広く信仰されたのだという。
バアルといえば太陽神でもあるとされるが、ここでも太陽信仰との関係が見出される。

境内には白清社（伯清稲荷社）の祠もある。
祠の狭い入口の奥は薄暗く、多少霊感がある真由美は「何かイヤな感じ」と言って、そこへ入るのを拒んだ。
一人で入ってお祈りする。
お稲荷様といえば、これもまた秦氏が信仰する神であった。
稲荷社の総本宮である京都の伏見稲荷大社は、秦氏一族が祭祀を行う神社だった。

稲荷社の祭神は宇迦之御魂神（うかのみたまのかみ）で、五穀を始めとする全ての食物をつかさどり、稲の成育を守護する神とされる。

稲荷の語源は、一般的には「稲成（いねなり）」で、稲の豊穣を祈念したものといわれる。
だが、これには異説がある。
ケン・ジョセフ親子が『[隠された] 十字架の国・日本　逆説の古代史』で書いているものだ。
群馬県多野郡吉井町に、「日本三古碑」のひとつとして知られる『多胡碑』と呼ばれる石碑がある。
江戸時代の文献によると、この石碑のかたわらから、棺を入れる石造りの室が発見され、そこに「JNRI」という文字が刻まれていた。
また、その文献によると、多胡碑の下からはかつて十字架が発見されたこともあるという。

「JNRI」というのはラテン語の「Jesus Nazareus Rex Indaeorum」の頭文字をとったもので、「ユダヤの王ナザレのイエス」の意味だ。
この JNRI の文字は、イエスが十字架で磔にされた場面を描いた絵画でもよく見られる。
巷で救世主ともてはやされているのに磔にされてしまったイエスを皮肉って、誰かが十字架にこういう札をつけたのだろう。
その後、INRI または JNRI という文字はクリスチャンにとっては重要な意味をもつようになった。

多胡碑は和銅 4 年（711 年）3 月という日付が刻まれているので、この JNRI の文字が刻まれた石室も、同じぐらいの年代に造られたと思われる。
1200 年も前にアルファベットで書かれた文字があったこと自体が驚きだが、当時すでにキリスト教が日本に伝わっていたというのは、もっと驚くべきことだろう。
JNRI は INRI と書かれることもあり、この場合の ”I ” は「Jesus」の代わりの「Iesus」だ。
稲荷神のイナリは、この INRI が訛ったものだという説がある。
だが、稲荷神社の祭祀形態にキリスト教に類似した要素が見られないことを考えると、これも前編で紹介した八幡＝イェフダ説と変わらず、ゴロ合わせで終わってしまっているかもしれない。

また、多胡碑自体も、711 年ではなく、もっと後世に作られた偽作とする説もある。

ところで、お稲荷さんといえば、オキツネさまがつきものだ。
なぜ、狐なのだろうか。
じつは、かつては狐ではなく狼が稲荷信仰と結びついていたという説がある。
第 29 代欽明天皇が幼少の頃に、ある夢をみた。
その夢に現れた人物は、「天皇が秦大津父（はたのおおつち）という者を寵愛されれば、壮年になって必ず天下を治められるでしょう」と告げた。
そこで秦大津父なる人物を探させたところ、山城国紀郡の深草の里に、その名の通りの男が住んでいた。
秦大津父に夢のことを伝えると、大津父が伊勢に商いに行った時に、山の中で二匹の狼が咬み合って、血まみれになったのに出会ったことがあるという。
そして二匹が咬み合うのを止めて、命を助けてやったというと、天皇は「きっとこの報いだろう」と言われ、大津父を手厚く遇された。
そして大津父は、大蔵の司に任じられたという。
この秦大津父は、聖徳太子の時代に秦氏の族長だった秦河勝の先祖だった。

古代、狼は大口真神（おおぐちのまがみ）と呼ばれる神とみなされていた。
狼はそのどう猛さ、荒々しさによって人間に畏れられ、神と見なされた。
アイヌの人々が、人間がかなわない存在をカムイ（神）と呼んだのと同じ発想だ。
狼は単に恐れられる存在ではなく、作物を食い荒らす猪や鹿を退治する農耕民の守護神でもあった。
その大口真神が転じて大神（＝狼）と呼ばれるようになったのだろう。
その伝でいえば、狼でなくても狐も穀物を荒らす鼠の類を退治してくれるために、穀物の守り神とされたのかもしれない。
もうひとつ蛇足で書けば、狼といえば、イスラエル十二部族のひとつのベニヤミン族の紋章が狼だった。

もっとも、この部族は北朝イスラエル王国の十部族ではなく、アッシリアに滅ぼされなかった南朝ユダ王国の方だが。

稲荷の語源に話を戻す。
インターネットで調べているうちに知ったことだが、南インド・イラニアン諸語に属するタミル語とシンハリーズ語で、狐のことを「nari」という。
こちらの方がむしろ、稲荷信仰と狐との関係があるかもしれない。

大和岩雄の『秦氏の研究』によると、三柱鳥居は「わが国唯一のものといわれる」とあり、また神社の由緒書きにも「日本で唯一」との記載があるが、実は三柱鳥居は日本にいくつか存在するのだ。
インターネットで見つけた論文『三柱鳥居の謎』『続・三柱鳥居の謎』（鈴木敏幸著）によると、以下のところにあるという。

掃除のため、水が抜かれた「元糺の池」の中に立つ三柱鳥居。

- 三囲（みめぐり）神社（東京都墨田区向島）
- 和多都美神社（長崎県対馬）
- 大神教会（奈良県桜井市）
- 穂積三柱鳥居（岐阜県武儀郡洞戸村）
- 大和三柱鳥居（岐阜県郡上郡大和）

なんと、三柱鳥居は東京にも存在したのだ。

この京都・丹後の旅の 3 ヶ月後の 2002 年 10 月 12 日に、その三柱鳥居がある三囲神社を、真由美と一緒に訪れてみた。
浅草駅から言問橋を渡り、隅田川沿いにその神社は、宇迦之御魂命を祭神としている。
三柱鳥居は境内の奥にあり、「三角石鳥居」と書かれていた。
鳥居の造りは蚕の社のものとまったく同じだが、こちらは池の中に立っているのではなく、代わりに中央に井戸がある。
この鳥居は、以前は西麻布にあった三井家の屋敷の庭に立っていたものを、この神社へ移されたという。
あの三井グループの三井家といえば、老舗デパート三越の前身の越後屋は呉服商を営んでいた。
そのために、京都太秦の蚕の社を信仰するようになったのだろうか。
かつて三柱鳥居があった三井八郎右衛門邸は、現在は小金井公園（東京都小平市）の中にある東京たてもの園に移されていて、その庭もそっくり復元されている。
三柱鳥居には、三井家の秘密が隠されているのかもしれない。

私事になるが、三井家には多少なりとも縁があるのかもしれない。
数年前に小平市花小金井に引っ越してきて間もない頃、すぐ近くの小金井公園へ行ってみた。
三柱鳥居などまったく知らない頃だったが、園内の東京たてもの園へ入ってみたら、復元された三井邸があり、何気なく見ていたのだ。
また、一時期、三井グループの中核である商社M社の本社で、業務委託として働いていたことがある。
イスラエル製のシステムを販売するために技術者が必要だというので、ご指名がかかったのだ。
その時以来、イスラエルとの縁もできてしまった。

十部族や秦氏のことなども、そういう縁がなければ研究しなかっただろう。

三囲神社（東京都墨田区向島）の三柱鳥居

歩いて次の目的地、太秦広隆寺へ向かう。
広隆寺に入る前に、時間の都合で、すぐ近くの大酒神社に先にお参りすることにする。
広隆寺の門から 5 分と歩かないところにある小さな神社だ。
大酒神社も、秦氏の創建だ。
御祭神は、秦始皇帝、弓月王、そして秦酒公。
弓月君は前述のように秦氏の祖とされる融通王のことだ。
秦始皇帝を祀っているのは、弓月君が秦始皇帝５世の孫だという伝承があるためだ。
この神社は、中世以降は広隆寺桂宮院の鎮守であった。

秦氏一族は自分たちが秦始皇帝の末裔だと語っていたが、これは渡来民としてのハク付けのためと一般には言われている。
その真偽はともかくとして、ハク付けのためならば、自分たちの先祖を祀る神社の祭神に始皇帝を加えることまでしなくてもいいのではないか。
少なくとも秦氏たちは、そのことを信じていたのかもしれない。
大酒神社は、もとは大辟神社と書いたという。
酒を創ったのも秦氏だと言われているので、それで大酒神社になったのか。
もっと昔には「大闢（だいびゃく）神社」と呼んだという。
「大闢」というのは、ダビデの漢訳語だ。

つまり、この神社はイスラエルのダビデ王、または「ダビデの子」と呼ばれたイエス･キリストを祀ったものだったと説く者もいる。
蚕の社の祭神がヤーウェで、こちらはイエスというわけか。

大酒神社では、牛祭りという祭が行われる。
鞍馬の火祭り、今宮のやすらい祭りとともに京都の三大奇祭とされるものだ。
かつては大酒神社の神社祭だったが、現在では広隆寺が執り行っている。
この祭の主役は摩押羅神（マダラジンまたはマタラジン）だ。
慈覚大師が入唐した時、勧請し持ち帰った神だといわれ、当初は叡山に祀られたが、のちに法隆寺に移され、この祭りが生まれたという。
ユーモラスな顔の白いお面を被った摩多羅神が、黒牛に乗って 4 人の赤鬼・青鬼たちと共に登場し、意味不明の祭文を読みあげる。
そして寺内をグルグル回り、牛を降り、壇上に上がって奏上の最中に観客から暴行を受けそうになり、堂内へと逃げ込む筋立てだ。
祭文を読み上げるラストシーンでは、秦山府君なる道教・陰陽道の人間の処罰や生死を司る神が登場するという。
そしてこれを読み終えると、摩多羅神は鬼を追うように薬師堂の中へ走り込み、祭りは終わる。

牛を追い払うといえば、ユダヤ教にも似たような祭がある。
新月の 10 日後に行われる「ヨムキプール（Yomkipur)」と呼ばれる大贖罪日の祭で、ここでは 2 頭の牛羊が引き出され、1 頭をユダヤの寺院に連れて行き、もう 1 頭を追い払うという。
牛祭は秦氏がユダヤ教の風習を持ち込んだものなのだろうか。

大酒神社といえば、実は秦氏創建の同名神社が兵庫県赤穂市の坂越にある。
司馬遼太郎がデビュー間もない頃に書いた『兜率天の巡礼』という小説に、その坂越の大

酒神社が登場する。

この作品では、秦氏がネストリウス派キリスト教徒（景教徒）だったという設定になっている。

司馬遼太郎は産経新聞京都支局の宗教担当記者だった頃に、秦氏と景教との関係に関する記事を書いていて、「すでに十三世紀において世界的に絶滅したはずのネストリウスのキリスト教が、日本に遺跡を残していること自体が奇跡だ」と締めくくっている。

牛祭に登場した摩多羅神と赤鬼・青鬼。現在使われる面は日本画家・富岡鉄斎による近年の作。
（写真は KyoPics サイトより借用→ http://kyopics.convi.ne.jp/index.htm ）

とすると、この著名な歴史作家は、この「奇説」に真実性を見出してこの作品を書き上げたのだろうか。

大酒神社をあとにして、広隆寺へ。

日本書紀によれば、推古 11 年（603 年）に秦河勝（はたのかわかつ)が聖徳太子から仏像を授かり、その像を安置するため 622 年に建立したという。

秦氏の氏寺であり、太秦寺（うずまさでら)、蜂岡寺、川勝寺、秦公寺（はたのきみでら)、太秦の太子堂などとも呼ばれる。

秦河勝は生没年未詳だが、7 世紀前半ころの廷臣で、秦一族の中心人物だった。

河勝は聖徳太子から仏像を賜るほど太子と親密な関係で、太子のブレーンだった。

聖徳太子といえば幼名は厩戸豊聡耳皇子(うまやどのとよとみみのみこ)といったが、この

名は母親の穴穂部間人皇女が馬小屋の前で急に産気づき、その場で産んだために付けられた名前だという伝承がある。
急に産気づいたからといっても、天皇の子供が馬小屋で生まれるはずはない。
もしかしたら、これは秦氏がイエス生誕伝説を持ち込んだものではないか。
母の間人（はしひと）という名も怪しい。
間人＝波斯人で、つまりペルシャ人だったという説がある。
中国語で波斯とはペルシャのことだが、これはペルシャ語によるペルシャの発音「ファルシー」の音訳だ。
『続日本紀』には、奈良時代に波斯人が渡来して居住したという記述があるので、その説はあり得るかもしれない。
もちろん、本当にペルシャ人だったとすれば、その親である蘇我稲目か、または妻の小姉君（おあねのきみ)もペルシャ人だったことになるが。

渡来民の秦氏は日本に様々な技術や文化を持ち込んだが、河勝が舞楽や能楽や雅楽などの芸能の起源にかかわっていたという伝承もある。
以前にインターネットで調べものをしていて、東儀秀樹のオフィシャルサイトを偶然に見つけた。
雅楽師であり、ニューエイジミュージックの世界でも人気がある人だ。
1300年以上も雅楽を世襲の業としてきた楽家の出だが､上記サイトで自身で書いている『東儀秀樹のこだわり絵日記』というエッセイによると、東儀家の祖は秦河勝だという。
また、前述の大酒神社の牛祭が行われる10月12日は秦河勝の命日であり、奇遇なことに東儀秀樹も同じ日に生まれているそうだ。
もしかしたら、この人にもユダヤ人の血が流れているのだろうか。
そのために、聖徳太子は同じ西アジアの民の血が流れる秦氏を特に重用したのか。

太秦広隆寺は、京都では最古の寺院の一つだ。
創建当初は今の場所から数キロ北東の地にあったといわれ、平安遷都時あるいはそれ以前

に現地に移った。
じつは、秦氏は平安京の建設にも大きな貢献をしたと言われている。
大きな貢献どころか、平安遷都を計画した『影の黒幕』だったかもしれないのだ。

784 年に、当時の桓武天皇は、奈良の都「平城京」を捨てて新しい都を山城国乙訓（おとくに）郡長岡村に移し、「長岡京」と命名した。
この遷都で造営長官を努めたのは藤原種継だった。
しかし長岡京へ遷都して 10 年たった 794 年に、こんどは山城国葛野郡へ遷都し、新しい都を「平安京」と名付けた。
このような短期間のうちに 2 回も遷都した原因は、怨霊によるものといわれる。

長岡京へ遷都して間もない 785 年、造営長官だった藤原種継が暗殺され、その容疑者として皇太子早良（さわら）親王が捕らえられた。
親王は無実を主張しながら憤死したが、その事件以後、桓武天皇の周辺に不吉なことが相次いで起こり始めた。
まず天皇の夫人だった藤原旅子が母亡くなり、2 年後に旅子自身も亡くなった。
その翌年には、天皇の母、高野新笠が死亡し、その 3 ヶ月後には皇后の乙牟漏が他界し、続いて別の夫人の坂上又子も死亡した。
ちまたでは疫病が流行り、また大洪水が発生して完成間近だった長岡京は壊滅に近い打撃を受けた。
こうした相次ぐ災難の原因は、早良親王の怨霊によるものと信じられた。
桓武天皇は、権力を得るために邪魔者を次々と陥れ、数知れぬ政治的謀略を重ねてきたために、怨霊を恐れる理由は十分にあった。
犠牲になった者の中には、天皇の兄弟までいた。

傷心の天皇に怨霊対策を示したのは、大政治家の和気清麻呂だった。
清麻呂は天皇を葛野に連れて行き、この地に怨霊封じを施した都を建てることを提言した。

桓武天皇は再遷都を決めると、造営長官に藤原小黒麻呂を任命した。
小黒麻呂は陰陽師に葛野の地相を占わせ、新しい都として適地だとわかると、奇門遁甲や呪術を駆使して怨霊封じ策を徹底的に行った。
こうして、千年の都「平安京」が完成した。
もっとも、長岡京の建設が頓挫した理由として、異説もある。
大和岩雄の『秦氏の研究』によれば、長岡京遷都の時、秦氏の血を引く藤原種継が急死したため、秦氏の経済的・技術的援助を受けられなくなり、頓挫せざるを得なかったというのだ。
これも、ひとつの理由としてあったのだろう。
大和説は、秦氏の存在がそれだけ遷都に欠かせない存在だったということをよく表しているだろう。

やはり、秦氏は平安京建設の「黒幕」だったのだ。
そのことについて、もう少し説明しよう。
まず、新しい都に選ばれた山背国葛野郡宇太村は、その西側にかけて、特に秦氏が住む土地だったということが注目すべき点としてある。
当時、山背国を事実上支配していたのは、豊富な財力を誇る渡来豪族の秦氏だった。
では、なぜそのような秦氏に関係する土地が新しい都として選ばれたのか。
じつは、長岡京への遷都の時に造営長官だった藤原種継の母は、秦氏だった。
そして、なんと平安京遷都の造営長官だった藤原小黒麻呂の場合は、その妻が秦氏だった。
そして平安京遷都を桓武天皇に提言した和気清麻呂は、岡山の美作といって、秦氏の一大拠点がある土地の出身だった。
清麻呂は秦氏と親密な関係にあったという。
このように、平安遷都プロジェクトの周辺には、秦氏コネクションというべき血縁と人脈があったのだ。
そして秦氏たちは、平安遷都のために広大な土地と莫大な財産を無償で提供したといわれている。

では、なぜ秦氏たちは何の見返りも期待せずに平安京の建設に協力したのだろうか。
そのことを考える際に、ヒントとなるかもしれないことがある。
それは、イスラエルの聖都であるエルサレムの名前の由来だ。
平凡社『世界大百科事典』によると、エルサレムの名はBC19～BC18世紀のエジプトの『呪詛文書』にRushalimumという形で登場する。
BC14世紀のアマルナ文書ではUrusalimと書かれ、ヘブライ語旧約聖書では Yerushalayimとある。
このヘブライ語のエルサレムを意味する「イェルシャライム」の原意は「シャレムの礎」で、シャレムはセム系諸族の黄昏と美の神のことだ。
シャレムは伝統的に「平和」と結びつけて解釈され、エルサレムは古くからシャレム神礼拝の中心地だったという。

また別の解釈もある。
「Yerushalayim」の「yeru」は古代セム語で「都市」の意味があり、「shalayim」は後に「shalom」と転化したが、前述のようにセム系諸族の神名から転じて「平安」を意味するようになった。
蛇足だが、shalomといえば現在のヘブライ語でも挨拶の言葉として使われる。
つまり「こんにちは」の挨拶は「あなたに平安あれ」という意味がある。
東京の路上でアクセサリーを売っている外国人を見つけたら、ためしに声をかけてみると良い。
「ハロー」の代わりに「シャローム」と一言いえば、相手は例外なく笑顔で「シャローム」と応えてくれるだろう（路上でアクセサリーを売っている外国人の男女はイスラエル人と相場が決まっている）。

話が逸れたが、つまりYarushalayimの意味は「平安の都」とも解釈できる。
なんと、平安京とエルサレムは、同じ意味をもっていたのだ。

イスラエル人にとって最も重要な都市であり聖都であるエルサレムの意味は、まさに「平安京」なのだ。
平安京の命名者は、誰かはわかっていない。
もちろん最終的な決定者は桓武天皇だろうが。
『日本書紀』によると、延暦 13 年（794 年）11 月、桓武天皇は次のように詔した。
「此の国、山河襟帯して、自然に城をなす。この景勝によりて、新号を制すべし。よろしく山背国を改めて、山城国となすべし。また子来の民、謳歌の輩、異口同辞して号して平安京という。」
つまり、誰がいうとはなく、人々が都を褒め称えて平安京と呼ばれるようになったというのだ。
その「人々」とは、都を企画し、設計し、建設した秦氏たちだったのだろうか。
彼らは、争いのない平安な都を夢見ていたのだろうか。

秦氏のことを夢中で調べていくうちに、彼らが、藤原氏とつながっていたことを知った。
梅原猛の『隠された十字架』や『神々の流竄』では、藤原不比等を始めとする藤原一族が、権力を得るために謀略の限りを尽くした人々として描かれている。
権力を保持するために邪魔な存在はどんどん消していき、実質的に日本を支配していた人々。
秦氏たちは何故、そんな藤原氏と婚姻関係を結び、関係を築いたのだろうか。
少なくとも藤原氏の側にとっては、秦氏と結びつく大きなメリットがあった。
目当てとするところは、秦氏の財力だ。
秦氏の方にとってみれば、聖徳太子と蘇我氏の時代がすでに終わり、これからは藤原氏についていった方が良いという政治的戦略だったのだろうか。
あるいは、もっと深いところでの意図があったのだろうか。

秦氏の祖先たちは、東海の島に理想郷があることを聞き知り、大陸から渡ってきたのかもしれない。

じつは秦の始皇帝の子孫ではなく、始皇帝の命で不死の薬を求めて日本に来たという徐福の子孫だという伝承もある。
その真偽はともかくとして、彼らが理想の国を求めて長い旅の果てに辿り着いたところは、実際は策謀や呪詛や怨霊に支配された国だった。
秦氏たちは、そんな国に嫌気がさしただろうか。
そして、真の平和に満たされた理想郷を夢見て、自分たちの祖国の都エルサレムに習って「平安京」を作った、というのはどうだろうか。

厭世的と言われるかもしれないが、私自身もこの世界につくづく嫌気がさしている。
いまの世界を眺めてみると、暴力や殺戮や物欲や乱れた性に支配された人間ばかりがまかり通る。
千年前とまったく変わっていない。
こんな世界では「最後の審判」が下っても仕方ないではないか。
かつてアーサー・C・クラークの作品に『幼年期の終わり』というのがあったが、実際はこの地球はまだ幼年期の終わりにも達していないと思う。
平安に支配された完全に平和な国だったら、都に平安京などという名前をつける必要はなかっただろう。
平安など微塵もない国だからこそ、心の底からの願いとして「平安京」という名を付けたのではないだろうか。
あのエルサレムがそうだった（かもしれない）ように。

京都は好きでよく旅するが、広隆寺を訪れるのは学生の時以来だ。
弥勒菩薩の像を見て、その美しさに感動したことが記憶に残っている。
ドイツの実存主義哲学者カール・ヤスパースは、広隆寺でこの像を見て次のような感想を述べた。
「私は今日まで何十年かの哲学者としての生涯の中で、これほど人間実存の本当の平和な姿を具現した芸術品を見たことは、未だ嘗てありませんでした。この仏像は我々人間の持

つ心の平和の理想を真にあますところなく最高度に表徴しているものです。」(『失われた原始キリスト教徒　秦氏の謎』、飛鳥昭雄・三神たける著、学研 より引用)

広隆寺は、表向きはもちろん真言宗の仏教寺院だが、実は建立されたときは景教の寺院だったという説がある。
そしてここに鎮座する弥勒菩薩は、実はイエス･キリストを祀ったものではないかという。
本稿のタイトル『古都に隠された十字架』は、もちろん梅原猛の『隠された十字架－法隆寺論』を意識したものだ。
この本では、法隆寺が実は聖徳太子の怨霊を祀るために藤原氏によって再建された寺だという説を唱えている。
だが、それだけで謎が解明されたわけではなく、まだ根本的な謎が残っているとして、この本の最後にこういう意味深なことを書いている。
「一つの謎の解明はまた新たな謎を生み、その謎の解明なしには『隠された十字架』という仮に私がこのエッセエにつけた題名の意味も十分には理解されないであろう。」(『隠された十字架－法隆寺論』、梅原猛、新潮社 より)
梅原は法隆寺に、本当の意味での「隠された十字架」、つまりキリスト教の影響を見据えていたのかもしれない。

広隆寺宝物殿に入ると、弥勒菩薩像に並んで、秦河勝の像があった。
意志の強そうな、精悍な顔つきをしている。
像の前で手を合わせ、念じる。
「わたしは秦氏のことを調べるために東京からやってきました。どうか歴史の真実をわれわれにお示しください。」
日本という国では、正しい歴史が伝わってこなかった。
歴史は、常に権力者の手によって歪められてきた。
だが、真実はいつか知らされなければならない。
この地球がいつか一つになって、この青い惑星全体が真の意味での「平安京」になるため

には。

河勝公は、弥勒菩薩像に平和の願いを込めたのだろうか。
この世が、争いのない平安な世界になるために、56 億 7 千万年後に衆生を救済に来るという弥勒菩薩に、「平安」を託したのだろうか。
また、弥勒は実は秦氏にとってのイエス･キリストだったのか。
聖徳太子がつくった十七条の憲法の一条「和をもって貴しとす」は、太子のブレーンだった秦氏の思想が取り入れられたのかもしれないとも思う。
そして秦氏たちの弥勒信仰は、もしかしたら空海にも影響を与えているかもしれないが、これはまた今後の研究課題としたい。

秦氏が仮にイスラエルの民だったとしても、次に出てくる疑問点は、秦氏たちがユダヤ教徒だったのか、景教徒だったのか、または原始キリスト教徒だったのかということだ。
古代史研究家の三神たけるによると、秦氏は巷で言われるように景教徒ではなく、原始キリスト教徒以外に考えられないという。
秦氏景教徒説は、江戸時代からあった。
中国の唐代には、大秦寺という景教の寺があった。
大秦とは中国語でローマを意味する、景教はもともとローマ帝国のネストリウスの開いたキリスト教の一派だから、こう呼ばれたのだろう。
秦氏の氏寺である広隆寺は、別名を太秦寺という。
太秦は大秦とも表記し、これは中国の大秦寺と同じで、実は景教の教会だったのではないかという説が生まれた。
前述の佐伯好郎もその説の支持者のひとりだったが、三神たけるによると、秦氏が景教徒ではなかったことを、佐伯も晩年に認めていたという。

三神によると、秦氏のキリスト教は、景教よりももっと古い原始キリスト教であり、イエス直系の弟子たちから成る組織「エルサレム教団」の末裔なのであるという。

すべてユダヤ人から成っていた当時の原始キリスト教は、第１次ユダヤ戦争以後、歴史上から忽然と姿を消した。
だが、エルサレムからヨルダン川の東側の町ペラに移住した後に、シルクロードを東方に向かった。
そして朝鮮半島を経て、東の果ての島・日本に辿り着いた。

これまで９ヶ月間ほど秦氏の謎を追いつづけてきて、秦氏が景教徒またはユダヤ教徒だったとするよりも、原始キリスト教徒だったという説に傾きかけている。
だが、もしそうだとして、前編に書いたようなユダヤ教と日本神道との共通点や記紀と聖書の類似点は説明できるだろうか。
それらは、必ずしも秦氏がユダヤ教徒であったとしなくても説明できるのではないか。
また彼らが原始キリスト教徒であったとしても、ユダヤ人だったのだから、ユダヤ教の風習などは多少なりとも残っていただろう。
または、神道にユダヤ教の風習などを持ち込んだ存在が他にいたことも考えなければならないかもしれない。

更に別の可能性として検討すべきことは、天皇家自身がイスラエル十部族の末裔だったということだ。
こういうことを書くと、巷に氾濫する「トンデモ説」と一緒くたにされる恐れがあるので、慎重になる必要があるが。

日本人の起源を探る様々な研究の成果として、弥生時代に『倭人』と称する人々が大陸から渡ってきて、先住民族（縄文人など）との間で混血してできていったのが日本人だという可能性が高くなりつつある。
だが、倭人がすべてイスラエルの民だったとしたら、それこそ現代の科学的研究の成果を無視するトンデモ説になってしまう。
わが師と仰ぐ本山博先生も、渡来した倭人は「新モンゴロイド（北方モンゴロイド）」で、

その元いた場所は、中国の南の方か朝鮮半島の西側だったと書いている。
だから、やはり倭人というのは、例えば鳥越憲三郎の説のように、中国の南の方にいて稲作農耕を営んでいた民族であるように思う。
だが、倭人の指導者階層のみが、彼らとまったく別の民族であったとしたら…？

渡来した天孫族のうちで、天皇家とその周囲の一部の氏族のみがイスラエル十部族の末裔の血を引く人々だった可能性は、いまだに可能性としては考えている。
それが事実だとすれば、記紀に旧約聖書の神話が挿入されていることも説明できるではないか。
ラビ・マーヴィン・トケイヤーも、そういう可能性を検討した一人だった。
トケイヤーによれば、古代イスラエルの王も天皇も、共に大祭司的な王であり、単なる政治的な王ではなく宗教儀式でも中心的役割を果たしたという意味では、両者は似ているという。
また、北王国イスラエルの王系は元々ユダの王系に対する反逆から生まれたものだから、彼らはアッシリヤ捕囚後に再びイスラエルの地に帰るよりは、もっと別の場所で国をつくった可能性も十分考えられるという。
そして、次のように書いている。
「天皇も神道も、秦氏が日本にやって来るよりも前から存在していた。日本の天皇家には、古代イスラエルの十部族の血、特に王系の血が流れているのであろうか。」（『日本・ユダヤ封印の古代史－失われた十部族の謎』、ラビ・マーヴィン・トケイヤー より）

イスラエル十部族のうち、王族の血筋を引くエフライム族の末裔が倭人を支配するようになり、倭人をひきつれて日本に渡ってきたということは、考えられないだろうか。
ユダヤ教徒と原始キリスト教徒という違いこそあれ、同じイスラエルの民だ。
秦氏がイスラエルの王族の末裔である天皇家を援助し、王の住む都にふさわしい地として平安京を造ったのかもしれない。
これはひとつの可能性にすぎないが、今後さらに調べていくことにしたい。

秦氏についていえば、彼らがイスラエル十部族の末裔だったかどうかということは、いまだに確信がもてない。
いままで調べてきたことから少なくとも言えることは、秦氏がユダヤ教的あるいはユダヤ＝キリスト教的祭祀形態や宗教慣習を日本にもたらしたということは、かなりの可能性があるのではないか、ということだ。

太秦をあとにして、京福電車で嵐山へ。
ものすごい人出だ。
昼食をとろうと思っていたが、どこも人でいっぱいで待たなければ食べられない。
ゴールデンウィークに、嵐山などへ来るものではない。
落ち着いて食事ができる雰囲気ではないので、嵐山を離れて次の目的地、松尾へと向かう。
阪急電車で次の駅の松尾には、今日の最後の目的地である松尾（まつのお）大社がある。

真由美は足に合わないサンダルを履いてきたので、この旅では散々だ。
もう一歩も歩けないと言っている。
空はどんよりと曇っていて、今にも雨が降り出しそうだ。
もう 2 時近いが、松尾駅のまわりにも適当な食べるところがない。
空腹のまま、松尾大社でお参りすることになる。

松尾（まつのお）大社は、とても大きな神社だ。
御祭神は、大山咋神と市杵島姫神。
加茂神社と並んで、京都で最古の神社だという。
太古の昔から松尾山の山霊を祀った神社としてあったのだが、秦氏が渡来してからは、秦氏の総氏神として信仰するようになった。
秦氏の謎を探る旅を締めくくる場所としては最適だろう。
結果的に、束の間の「断食」をしてお参りできて良かったかもしれない。

時間がなくて見れなかったが、この神社には『お酒の資料館』というのがある。
古くから酒造の神さまとされて、酒造繁栄のご利益があると信じられていた。
現在でも酒造業者が多く信仰し、彼らが奉納した酒樽が境内に積まれている。
日本の酒造の起源を調べると、『播磨国風土記』にはカビの生えた乾飯（かれいい）で酒を醸したという伝承が記載されていて、日本では 8 世紀初頭すでに酒造に麹が用いられていたらしい。
古来、酒造の神として信仰を集めていたのは奈良県桜井市の大神神社、京都市の梅宮大社、そして松尾大社の 3 社だった。
5 世紀後半頃、この地に秦の民が集められた際に伴造（とものみやつこ）に任ぜられた秦酒公（さけのきみ）は、酒造技術者だったと言われる。
そして秦氏たちが日本の酒造技術の基礎を作ったと考えられている。

秦氏たちは、なぜ日本酒を作ったのか。
もし彼らがユダヤ人だったとしたら、祖国の風習に従って、葡萄酒を神前に供えたいと考えたかもしれない。
だが、まだその頃の日本にはブドウはなかった。
日本の葡萄の歴史は、718 年に行基が中国からもたらされた葡萄の種子を甲州で播いたことが始まりとも、また 1186 年に甲州勝沼の雨宮勘解由がこの地で野生葡萄を発見し、自宅で栽培したことが始まりとも言われている。
それで、ブドウの代わりに米を原料とした酒を考案したのだろうか。

松尾大社の本殿。酒樽がずらっと並ぶ。

真由美は足が痛くて歩けないと言って、お参りせずにベンチに腰掛ける。
仕方なく、拝殿の前に立ち、一人でお祈りする。
秦氏一族に対する感謝の念をこめて。
そして社務所へ行き、おみくじを引く。
今回の旅を締めくくるような象徴的な結果が出るかどうか…。
そして…、やっぱり出た。
箱を振って出た番号は、12 番。
「大吉」だった。
秦氏のことを調べに東京から来て、秦河勝公に祈った結果が、これのだろうか。

真由美は休憩したあとで気を取り直して、拝殿で手を合わせる。
彼女に 100 円玉を 2 枚渡して、おみくじを引くように言う。
そして、彼女が引いた番号は、15 番。
「大吉」だった。
この 3 日間の旅で、清水寺、八坂神社、丹後・籠神社、東寺、そして松尾大社で、二人で計 5 回おみくじを引いたが、すべて同じ結果になった。
しかも、末小吉、中吉、小吉、吉、大吉と、すべて異なる結果になった。
凶を除いていちばん良くない末小吉から始まって、最後は最高の大吉。
こういうことが偶然で起きる確率は…？
真由美にも大吉が出たのは、靴ずれで足が何箇所も膿んでしまったのにお参りしたことを、神さまが評価されたためだろうか。
二人は運命を共にするようになっているのだということを、神さまが知らせてくださっているのではないか。
末小吉から大吉まで様々な結果が出たのは、これからの人生で、苦しみも楽しみも、二人三脚で共に分かち合っていきなさいという意味なのかもしれない。

こうして、秦氏ゆかりの地を巡る旅は終わりに近づいた。

だが秦氏の謎はまだまだ解けない。
謎が謎を呼び、調べれば調べるほど、更に調べるべきことが増えていく。
なぜ秦氏たちは歴史の表舞台に上がることをせず、常に影で舞台を支える「黒子」であることを選んだのだろうか。
いまいちど、広隆寺に戻って、秦河勝の像に尋ねてみたい気がする。
「あなたがたがこの国で見た『夢』は何だったのですか？」と。
そして、自分自身にも尋ねてみたいことがある。
「なぜ俺は、こんなにも秦氏たちに惹かれるのか？」と。

あのとき広隆寺で、秦河勝の像に手を合わせて「真実をお示しください」と懇願した。
秦氏の総氏神さまのところで頂戴した大吉は、それに対する応えなのだろうか。
「おまえの祈りはたしかに受け取った。がんばりなさい」という秦河勝公のメッセージなのか。
たとえ信仰は異なっても、宇宙創造の神に宇宙全体の調和を祈る気持ちに変わりはない。
「ミロクの世」を求める想いはひとつだ。

松尾大社をあとにして、5 分ほど歩いて松尾駅へ。
駅に着いた直後に、雨が降り出した。
神さまに感謝する。
いつものことなのでまったく驚きはしないが、ありがたいことだと思う。
こういう神さまの恩恵を『期待』してはいけないが、つい心の底で「もしかしたら…」と思ってしまう。
そして、いつも「やっぱり…」と思う。
何かの目的意識をもって聖地を訪れると、いつもこうなのだ。
もっとも、あんまり期待し過ぎると、時には「お叱り」を受けることもあるのだが。
いつもいつも「小説よりも奇なる」出来事が起きて、そのおかげでこういう作品が書けるようになるのだ。

電車に乗って、京都駅へ。

新幹線は 19 時すぎに発車なのだが、まだ 5 時間もある。

だが、外は雨がしとしと降っている。

Excel で綿密に立てたスケジュールでは、新幹線の発車直前まで目いっぱい京都を回る予定だった。

だが、この雨のことを考えると、早めに全部見終わって良かったのだ。

心の中で、神さまに感謝する。

信仰する神社の宇宙創造の神、この 3 日間でお参りした神社仏閣の神仏がた、そして秦河勝さまに。

明日 5 月 5 日は 46 歳の誕生日だから、これは神さまからの 1 日早い誕生日プレゼントだと思うことにしよう。

【2003/01/12 記】

【参考文献】

- 秦氏の研究　日本の文化と信仰に深く関与した渡来集団の研究、大和岩雄、大和書房、1993
- 日本にあった朝鮮王国　謎の『秦王国』と古代信仰、大和岩雄、白水社、1993
- 日本・ユダヤ封印の古代史－失われた十部族の謎、ラビ・マーヴィン・トケイヤー、徳間書店、1999
- ユダヤと日本　謎の古代史、ラビ・マーヴィン・トケイヤー、産能大学出版局、1975
- ［隠された］十字架の国・日本　逆説の古代史、ケン・ジョセフ・シニア＆ジュニア、徳間書店、2000
- 大和民族はユダヤ人だった、ヨセフ・アイデルバーグ、たま出版、1984
- 失われた原始キリスト教徒「秦氏」の謎、飛鳥昭雄・三神たける、学研、1998
- 隠された十字架　法隆寺論、梅原猛、新潮社、1972
- 神々の流竄、梅原猛、集英社、1985
- 古代ユダヤの刻印、宇野正美、日本文芸社、1998
- ユダヤ教の本、編集長・増田秀光、学研、1997
- 霊的成長と解脱、本山博、宗教心理出版、1988
- 兜率天の巡礼（『ペルシャの幻術師』所収）、司馬遼太郎、文芸春秋、2001
- 三柱鳥居の謎、鈴木敏幸、 http://suzuki-t.hp.infoseek.co.jp/
- 続・三柱鳥居の謎（改）、鈴木敏幸、 http://suzuki-t.hp.infoseek.co.jp/
- 摩多羅神はどこから来たのか？～ダビデの子孫～、Ikko Kurosawa、http://home10.highway.ne.jp/ikko/

・ 京都を古代史的に考える立場から、丘真奈美、http://www.zero-corp.co.jp/kyoto/kyotokansyo/index.htm
・ 東儀秀樹のこだわり絵日記、東儀秀樹、http://www.toshiba-emi.co.jp/togi/
・ 草原から来た天皇、としちん、 http://www.ne.jp/asahi/t-oura/expo/sohgen/t0200.html
・ シュメール＝スメラ民族、？、http://www4.justnet.ne.jp/~hinomoto/
・ 三神たけるのお伽秦氏、三神たける、http://kitombo.com/mikami/back.html

【アクセスデータ】

- 東寺：
  京都市南区九条町　TEL: 075-691-3325
  拝観時間：9:00～16:00
  拝観料：500 円
  近鉄京都線・東寺駅より徒歩 7 分。
- 木嶋坐天照御魂神社（蚕の社）：
  京都市右京区太秦森ヶ東町 50　TEL：075-861-2074
  京福電鉄嵐山線・蚕の社前駅より徒歩 5 分。
- 広隆寺：
  京都市右京区太秦峰岡町　TEL：075-861-1461
  開扉：9:00～16:00
  京福電鉄嵐山線・太秦広隆寺前駅より徒歩 1 分。
- 大酒神社：
  京都市右京区太秦峰岡町
  京福電鉄嵐山線・太秦広隆寺前駅より徒歩 3 分。
- 松尾大社：
  京都市西京区嵐山宮町 3　TEL：075-871-5016
  阪急電鉄嵐山線・松尾駅より徒歩 3 分。
- 三囲（みめぐり）神社：
  墨田区向島 2-5-17
  都営浅草線／営団銀座線・浅草駅か東武伊勢崎線・業平橋駅より徒歩 15～20 分。

- インターネットでこのページを検索した方々へ

『聖地巡礼ファイル』は、下記ページがトップページとなっており、他の作品もありますので、ぜひアクセスしてみてください。
http://www.ne.jp/asahi/pasar/tokek/SJF/index.html

2003 年 1 月 12 日　初版発行
2004 年 7 月 23 日　第二版発行
筆者・発行人：百瀬直也　2003 Naoya Momose (c) 無断転載を禁ずる
発行所：〒187-0002 東京都小平市花小金井 6-103-13　TEL: 0424-65-5051
URL: http://www.ne.jp/asahi/pasar/tokek/
（Email は変更の可能性があるため敢えて書きません。上記サイトで探してください）